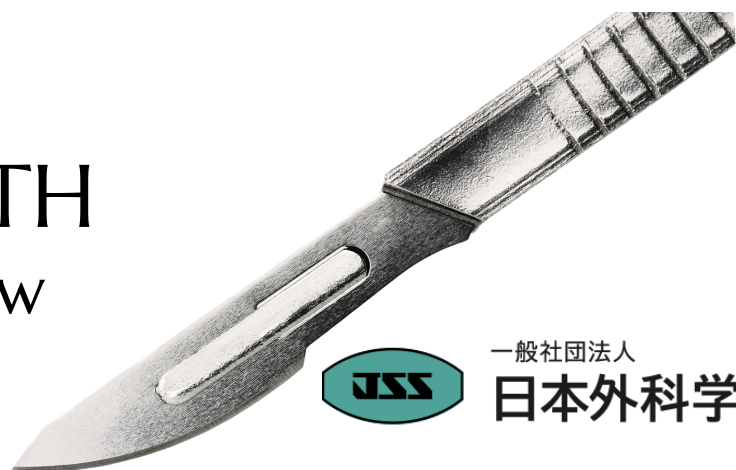


BUILD YOUR PATH

Role Model Interview



山田 美保子 先生 消化器外科医

PART 1 : BUILD 「あなたは何を築いてきましたか？」

Q1. まずは、現在の肩書やご専門分野について教えてくださいませんか？

現在は名古屋大学の消化器・腫瘍外科で助教を務めており、主に肝胆膵・胆道疾患の診療や教育、研究を担当しています。

学会活動としては、日本消化器外科学会や日本肝胆膵外科学会の評議員を務めているほか、日本専門医機構の「若手専門医師部会」のメンバーにも所属しています。こちらは始まったばかりの取り組みで、専門医機構の上層部の方々に対して、若手・中堅医師の現場の声を反映させ、システムの改善に向けた意見交換を行っているところです。

Q2. 医学生や研修医の頃は、どのような医師を目指していらっしゃいましたか？

学生時代から一貫して「手技や手術に優れ、チームワークを大切にする医師になりたい」と考えていました。

元々消化器疾患には非常に興味があったのですが、私が研修医だった20年ほど前は、まだ医療現場に男性社会の色合いが非常に濃く残っていた時代でした。「乳腺外科なら体力のない女性の私でもしっかり居場所を作ってやっていけるかもしれない」という思いもあり、当時は消化器と乳腺の両方に興味を持っていましたね。

Q3. 最終的に消化器外科の道を選ばれた決め手は何だったのでしょうか？

臨床研修医の後半で外科に進む決断をしたのですが、当時は当科（名古屋大学）の医局関連病院では、消化器外科医が消化器疾患も乳腺疾患も両方診るのがごく当たり前のスタイルだったんです。

先ほどもお話しした通り、20年ほど前はまだまだ強烈な男性社会で、「女性医師が生き残るなら乳腺外科かな」という思いもどこかにありました。一方で、上司や同僚の先生方には、性別で分け隔てす

ることなく受け入れていただき、そのことには今でもとても感謝しています。そして、所属した医局の環境が「消化器も乳腺も分け隔てなく全部診る」という体制だったおかげで、「ここなら自分のやりたい消化器疾患の診療をやりつつ、乳腺のキャリアも同時に積める」と前向きに捉えることができたのが一番の決め手でしたね。

今の若い先生方の感覚からすると「消化器の先生が乳腺もやってるの!？」と驚かれるかもしれませんが（笑）、当時は医局から指示された赴任先へ行き、与えられた現場で必死に全力を尽くす中で自然とキャリアが形作られていく時代でした。その時代の巡り合わせと環境があったからこそ、迷わず消化器外科という大きな海へ飛び込むことができたのだと感じています。

Q4. 若い頃に思い描いていたキャリアと比べると、現在はどのくらい一致していますか？

少し違っているのかなと思います。

当時は開腹手術が主流の時代でしたので、「市中病院で胃癌や大腸癌などの消化管腫瘍を診る一般的な外科医になるのかな」とぼんやりイメージしていました。結婚などのライフイベントを迎えても何とか工夫して外科医は続けていくつもりでしたが、まさか自分が肝胆膵外科の専門医になり、大学病院の教員として働いているとは全く予想していませんでした（笑）。

PART 2：PATH「あなたの歩んできた道」

Q1. これまでのキャリアを振り返り、どのような分岐点（PATH）があって現在の専門性に繋がったのでしょうか？

大きな転機は30歳の時でした。

当時、巨大な肝腫瘍や両葉多発の肝転移を持った患者さんがいらっやって、私自身は「これはさすがに切除不能だろう」と判断したんです。しかし、上司の先生が複雑な解剖を解き明かしながら、見事に華麗に切除されたんですよ。その手技と戦略の美しさに強い衝撃を受け、「肝切除ってなんてすごくて面白いんだ!」と感動しました。「自分には到底真似できない」とその時は思いましたが、この体験が肝胆膵外科への強い憧れの原点になりました。

その後、32歳で消化管専門の病院へ赴任して乳腺疾患からは離れ、34歳の時に苦労しながら初めて英語で肝胆膵領域の学術論文を書き上げました。

そして最大の分岐点が、35歳で静岡県立静岡がんセンターの肝胆膵外科ヘチーフレジデントとして赴任したことです。当時は上の先生方の手術を助手として見ながら徹底的に学ぶ時代でしたが、ここで肝臓の術前戦略や緻密な手技をみっちり叩き込まれました。高度技能医を取得し、「将来は後進をしっかりと指導できる肝胆膵外科医になる」と強く心に誓った修練期間でした。

Q2. 肝胆膵外科を選んで「本当に良かった」と実感する瞬間ややりがいは何ですか？

肝胆膵外科の醍醐味は、高度な手術手技はもちろん、術前の適応判断や精密なアプローチの立案、そして術後管理に至るまで、一人の患者さんと長く深く向き合えることです。他院で切除不能とされた

患者さんに対して、チームで術式を立てて手術を成功させ、術後にさまざまな問題が生じて、一つひとつ適切に対応しながら回復につなげ患者さんに笑顔で退院していただけた時は、何物にも代えがたい達成感があります。

また、がんセンター時代に高度技能医を取得した後に、約10年下の後輩医師に対して、初めて膵頭十二指腸切除術（PD）の前立（第一助手）として指導を行い、無事に執刀させることができた時の経験も忘れられません。「指導者として後輩を育て、感謝される喜び」を知った、非常に感慨深い瞬間でした。

Q3. 外科専門医の取得や若手時代の研修は、ご自身の基盤にどう影響していますか？

外科医にとって、外科専門医というのは「持っていて当たり前」「取っておかなければプロとしてのスタートラインに立てない」という必須の資格だと思っています。

専門医取得に向けて消化器や内分泌、救急など幅広い領域の手術を経験する中で、消化器外科医としての覚悟が固まりましたし、多様な症例に触れて基本的な手技を徹底的に叩き込んだことが、その後の高度な専門領域へステップアップするための揺るぎない土台になりました。

PART 3：NEXT PATH「これから歩く人へ」

Q1. もし今、ご自身が医学生や研修医時代に戻れるとしたら、当時の自分にどんな言葉をかけてあげたいですか？

「プライベートも含めて長期的で現実的な人生設計を立てて、目標に向かって今できる行動を起こしなさい！」と伝えたいですね（笑）。

若い頃はとにかく目の前の仕事や現場に夢中で、プライベートも含めた将来のライフプランをあまり現実的に考えていませんでした。上の先生からアドバイスをされても「ふーん」と聞き流してしまうようなところがあったので、「後から焦らないように今から行動しなさい」と自分に言い聞かせたいです。

また、当時は少し保守的というか、外の世界へ一歩踏み出すのが怖かった部分がありました。私は海外留学までは挑戦しなかったのですが、今振り返ればもっと気軽に学会に行ったり、他施設へ見学に行ったり、留学も含めて「若いうちにもっと自分の選択肢や視野を気軽に広げておけば良かったな」と思っています。

それと、「休むこととサボることは違うよ」という点も強く強調したいです。私が若手の頃は、病院から呼ばれば、用事があっても「はい」、用事がなくても「はい」と言って、とにかく病院へ向かうのが当たり前でした。用事がないのに休むことにどこか罪悪感があったんですよね。でも、「何もない日という用事を作る」ことの大切さに気づいてからは、心にも余裕が持てるようになりました。休養をとることも、外科医として高いパフォーマンスを維持するための立派で重要な仕事なんです。

Q2. 最後に、外科を目指すか迷っている若い先生方へ、一番伝えたいメッセージをお願いします。

外科を選択するにあたって、体力面やプライベートの時間の制約など、一定の覚悟が必要なのは事実です。

しかし、それでも「やっぱり外科をやりたい!」「手術が好きだ!」という気持ちが少しでも上回るのなら、絶対に恐れずに挑戦してみてほしいと思います。

私自身、かつては「プライベートを犠牲にしているのかな」と悩んだ時期もありました。でも、結婚の時期、働き方のスタイルに関わらず、自分が選択した道でしか味わえないかけがえのない経験とやりがいがあります。

今の一步を踏み出した先には、一昔前のような画一的で厳しいだけの道ではなく、一人ひとりのライフステージや多様な価値観に合わせた様々な選択肢とキャリアパスが広がっています。自分の「やりたい」という素直な気持ちを信じて、ぜひ勇気を持ってこの世界に飛び込んでください!